

肺気腫

中村 龍介

四月二十日夜、今年も次女の淳子と二人、甲子園球場の四万観衆の中に居た。翌日は淳子四十六歳の誕生日。トラキチ親子の我々は、毎年この時期、甲子園に詣で、タイガースの雄姿を観戦する。タイガースが勝利すれば、誕生日の格好の贈り物にするという趣向だ。

この日は少し様子が違った。先ほどから息苦しさが続く。どうしても呼吸することに意識が集中し、野球の方は興ざめ状態なのだ。タイガースが負けている所為もあるだろう。加えて、四月のナイターはまだ寒い。黄色のユニフォームの上にジャケットを着込んではいろのだが、ときおり吹きつける六甲おろしの夜風は冷たい。

ゲームが七回裏まで進んだ時、勝負に見切りをつけた阪神ファンが席を立ち始めた。我々も帰りの電車が混雑するのを避けるために早々に引き揚げることにした。

その夜、疲れているのに眠れない。矢張り呼吸することに意識が集中してしまふ。意識を逸らすと呼吸が止まるのではないかという錯覚に陥り、ホテルのベッドで悶々として朝を迎えた。

翌二十一日は朝から雨。その日に予定していた墓参は中止して、早めに東京に戻った。淳子には申し訳なかったが散々な誕生日になってしまった。

その淳子の強い勧めもあって、翌二十二日には朝から昭和大学病院を訪ねた。この病院との付き合いは古い。

二十年ほど前、身体の不自由な妻を診てもらったのが最初だった。その後、私の前立腺ガンの治療も始まった。八年前妻は他界したが、私のガン治療は今年で十五年になる。

この日は、初めて呼吸器内科の診察を受ける。二時間ほど待って、診察があった。かなり年配の医師で態度も高圧的だ。私の書いた調査書に目を通していたが、

「まず、タバコを止めなさい。百害あって一利なしだ」

「そうは仰つても、私はタバコにそれなりのメリットを感じ

るから吸っているのですが：」

「それならどんどん吸えばいい。肺がどうなっても構わないなら、どんどん吸いなさい」

「：」

何ともやりにくい先生だ。とりあえず、必要な検査をしてから再度診察してもらうことになった。

肺のX線写真、呼吸機能検査、血中酸素濃度などの検査を終え、再び先ほどの医師の診察を受ける。デスク上に広げたX線写真やパソコン画面上の検査データから目をそらすと、こちらに視線を向けて口を開いた。

「肺気腫。間違いない、肺気腫だね。この病気は薬や手術で治ることはない。今までの生活習慣を替えていく必要がある。まず、前提がタバコを止めることだね」

何となく先生の口元が緩んでいるように見える。

「分かりました。そこまで言われるのなら禁煙します」

「何なら禁煙外来というのもあるよ。受けてみるかね」

「いや、そういうのはお断りします。でも、止めると決めたからには止めます」

威勢よく言ってはみたものの、特に自信があったわけではない。反りの合いそうにない医師に強がってみたかったのだ。

「そうですか。立派な決心です。病院としても肺気腫治療のお手伝いをさせていただきます」

不良少年を更生させた指導官の心境なのか、言葉遣いまで変ってしまった。次回のアポイントと担当医（もちろん別の先生）を決めて病院を後にした。

この日のことを淳子に話したところ、

「次の訪問日には一緒に行く」という。

これには少し驚いた。父親の健康状態にはいままで殆んど関心を示さなかった。淳子はアラフォーを卒業するころに、介護の仕事に入った。約五年間ヘルパー稼業を経験し、昨年ケアマネジャーの資格を取った。手始めに、父親を練習台にケアマネジメントの実技を体験しようという胸算用なのか。

その夜、オーストラリア在住の長女、恭子からメール。

「淳子から聞きました。肺気腫はCOPDと呼ばれ、煙草を吸う人が患う典型的な病気で、私の勤めている病院でもよく

見かけます」

娘たちは、世界中どこでも無料で通話できる『ライン』というアプリを利用して、瞬時に情報交換しているようだ。

どうやら、オーストラリアで看護師をしている長女とケアマネの淳子がタッグを組んで、父親のリハビリ指導をやるうというのだろうか。それとも、看護師とケアマネ間の単なる主導権争いなのか。

恭子からのメールにはCOPD治療上の注意事項と並んで、如何に煙草が肺を蝕んでいくかがイラストで説明されていた。

COPDは肺胞の病気だ。肺胞とは肺の最も大切な機能をする器官で、体内から排出される二酸化炭素と外気から取り入れた酸素を交換する働きをする。つまり、肺胞の機能低下は、十分な酸素を体内に供給できないことにつながる。

疲れやすい、息切れする等々、これまでの症状は、酸素の供給不足から説明できるというわけだ。

四月二十七日、肺気腫治療最初の日、昭和大病院を訪ねた。患者にはケアマネの淳子が付き添う。病院から見ると、ケアマネが患者をつれて来たに見えるが、実は私の運転する車に乗って付いてきたのだ。

担当医となるHは四十前後のイケメン先生。そうなると、付き添いの淳子が俄然張り切る。医師との受け答えは患者の私よりもケアマネの淳子が主導権を握る。恐らく、ヘルパー時代に肺気腫の患者に付き添って病院を訪ねた経験があるのだろう。その時の場面を思い出しながら医師との会話を運んでいるような印象を受けた。

最初の診察が終わり、家に帰る車の中で淳子に話しかける。「今日は患者よりも付き添いの方が真剣だったのは、H先生がイケメンだったからかな」

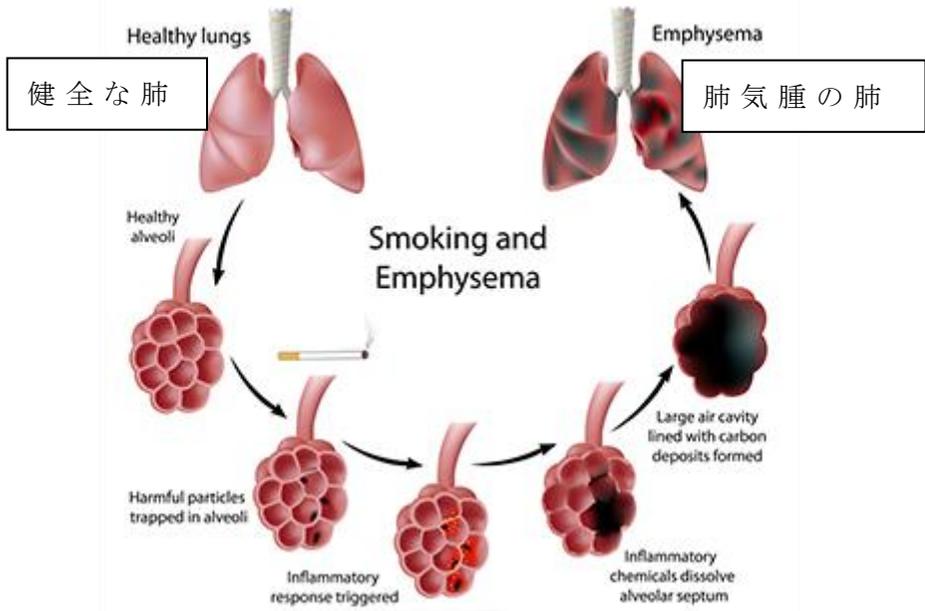
「あのセンセイ、悪くないわね。説明も丁寧だし、合格点の上の方かな。今度の診察日にも一緒に行くことにするから……」
何だか、これからもケアマネが治療の主導権を握りそうな気がする。

さて、遠隔地の看護師はどう出るのだろうか、何とはなく楽しみではある。

(了)



喫煙と肺気腫



【二〇一六年四月記 原稿用紙約九枚
課題「(最新の?) 通信媒体」】